

戦争体験

たのえ よしはる
田之江 美春(三島江在住)

出征する時は三島鴨神社の裏鳥居前で皆さんに挨拶をしました。挨拶した内容は記憶がはっきりしていませんが、以前に友達が出征する時にうまく挨拶したので”うまく言うな”と感心したことがあったことを、その時は覚えていたので、そのようなことを言ったと思います。はっきり覚えていません。

九州に集められ、陸軍として船で台湾に渡りました。その後マニラに移動しましたが、着いた時にバナナを3本ほど貰いましたが青くて硬く、とても口に来るものではなかったので捨ててしまいました。ところがマニラは暑いところで荷物の中に入れておいた人のバナナは、すぐに黄色になりよい香りがして食べ頃になってきました。惜しいことをしたなあと思いました。履物は靴ではなく地下足袋だったので底に板をくくりつけて歩かないと焼きつくような暑さで歩くことができないような所でした。

自分は通信兵だったが技術的にはうまくできなかった。3年程で任務が終了だったので役立つところまで上達することなく終わった。

陸軍で攻められて転々としながら負けるなと思っていました。日本軍には物資が不足していて食べ物も装備も不十分で戦意を喪失するような日々が続いていました。

敗戦後、シンガポールで使役に駆り出された。港で船からドンゴス[ゴロフレン]の袋に入った100キロの米を二人で歩み板を渡って降ろす作業は怖かった。歩み板はリズムを合わせて歩かないとバランスを崩して海に落ちてしまうので慎重に作業しないといけなかった。作業は辛かったが、その米は本当に美味しかった。

また、使役では倉庫内の荷物の整理や員数点検をしました。缶詰のパックを並べて整理し個数を報告するのですが、日本人だったら何段積んで何個並べたら総数幾らと分かるのですが現地人は全部一つひとつ数えてからOKを出します。見える缶詰パックの後方に缶詰を置いて、点検後その缶詰を倉庫の壁の下に穴を開けて外に出しておき、夜になって缶詰を取りに行くというようなこともしました。食べ物十分に当たらないので、そんなこととして飢えを凌いでいました。

体調を崩して検診を受けましたら「肺浸潤(肺結核)」と言われました。大きなレントゲンで撮影して診断してくれました。診断の結果、傷痍軍人として別の部屋で休養することになりました。

その後、日本に帰れることになり船で昭和21年6月広島に着きました。日本の黒屋根の家屋を見て、「日本に帰ってきたんやな！」と思いました。汽車

で大阪に帰り国立病院に入院しました。傷痍軍人として帰ってきましたので白色の着物風の服を着ていました。戦後、国内で駅や賑やかな人通りの多い所で、白色の着物風の服を着た人を見かけられた方も多くいられると思いますが、その服を着て帰りましたので全ての所がフリーパスで、船に乗る所から大阪に着くまで荷物の点検は一切受けずに帰ってきました。

大阪の国立病院へ、国鉄に勤めていた兄が初めて見舞いに来てくれた時は嬉しかった。日本に帰ってきて家族と会うのは初めてだったので、「帰ってきてよかった」と思いました。

病院より家に戻りますときは、家族以外親戚の者も家に集まって迎えてくれました。親は傷痍軍人の白色の服を着て帰ってきたことに複雑な気持ちだったようでした。

帰ってから同級生の家に挨拶に行くと、その友達は戦死しましたと知らされショックでした。

なんと親御さんに言って挨拶しているものやら、急に分からず、いそいで友達の家を後にしました。

体の方は、茨木市内のお医者さんに診てもらい、いい薬(抗生物質)があるが高齢になると耳が聞こえなくなると言われたが治療を受けることにしました。支払いはお医者さんの要望でお米を届けました。こちらは百姓ですのでお米で払うのは有難かったが、戦後の食料不足が続きお医者さんもお金よりお米という現物の方がよかったようでした。医者と言ったとおり耳の方は聞こえなくなり補聴器の世話になっています。

こんな話していても、戦争はいかんとおもいます。どんなことがあっても戦争はよくないとつくづくおもいます。もう戦争は二度と起こらないように、また起こさないようにしないとイケないと思ひます。

付記：三箇牧戦争犠牲者追悼平和祈念式実行委員会

* プロフィール

田之江美春 (たのえよしはる)
高槻市三箇牧地区三島江在住
大正 11 年生れ 90 歳
専業農家、一時期 酪農：乳牛 2 頭
地域各種ボランティア

* 本稿は口述筆記 (坂田光雄) による。